

「南山背の古道と史跡を訪ねる」

〈はじめに〉

1、古代の山背の国とは

「やましろ」は古くは「山代」「山背」と記された。この名称は奈良盆地から見て「奈良山」を北に越えた背後の地という意味で、今の木津川市山城町いう。ここに当初の国府が置かれ、後には恭仁京が営まれた。この辺りが山背国の中心であったことを物語る。延暦 13 年に桓武天皇が「平安京」に遷都し、「山背国」を「山城国」に改称して以降、「山城国」は拡大して京都盆地全域をさす言葉となる。

「南山城」は、京都盆地で最初に開けた先進的で先端的な地であった。奈良盆地を発する古北陸道や古山陰・山陽道等の主要な街道が通り、行き交う人々がもたらす文化の姿は、「万葉集」に多く見られる。また、この地には古くから高句麗系の渡来人が居住していて、上狛（木津川市山城町）、下狛、狛田（いずれも精華町）の地名が残る。開明的な環境と、地域に自生的に形成された文化が融合し、新しい文化を生み出す地域であった。

（井上満郎氏「古代山城と渡来人」より）。

2、古代道路と南山城

古代、ヤマトから東国や越の国、丹波国や出雲国に至る交通路は、山背南部を木津川沿いに進み、宇治を経由するのが主なルートであった。南山背には、木津川を挟んで次の 2 つの古代の道があったと思われる。

①古北陸道・・・木津川右岸の山麓の道

奈良市の北部の奈良山丘陵を越えて木津（古くは水泉・泉津：いずみ）で木津川を渡り、加茂、下狛、蟹幡から宇治に至り、宇治川を遡行、或いは、山科・逢坂を経由して琵琶湖西岸を北上する。

②古山陽道・古山陰道・・・木津川左岸の道

奈良山丘陵を歌姫で越えて、木津川の左岸沿いに八幡丘陵の東麓を北上し、山崎から乙訓に至る。

木津川の水運

木津川が古代の物流ルートとして果たした役割は大きく、6 世紀に難波津が国際港として整備され、大型帆船が枚方まで遡行するようになると、物流ルートが大きく変わる。

「難波津—淀川—小椋湖—木津川—ヤマト」の北回りルートである。

因みに、継体大王の「樟葉宮」「筒城宮」「乙訓宮」へと度重なる遷都は、淀川水系（淀川、木津川、桂川）を支配することにより、権力基盤の確立を意図したものであろう。

奈良時代になると、木津（泉津）は平城京への外港としての位置づけとなる。藤原京や平城京の建設の際には、近江の田上山から切り出した木材が、瀬田川—宇治川—巨椋池—木津川を運漕され、「泉津」から歌姫越えで陸路を搬送されたことが知られている。

3、今回の南山城の探訪について

古事記・日本書紀には、特に古い時代の南山城に関連する事項が多く出てくる。初期のヤマト王権にとって、奈良盆地に隣接する南山城の豪族を馴致するとは、国の基盤を固めるうえで最も重要であった。今回は、木津川左岸の古道に添いのコースで、南山城に残された遺跡・寺社・伝承を訪ねる。

(注) 古事記・日本書紀と南山城の古い地名

①崇神天皇紀、武埴安彦（たけはにのやすひこ）の争乱と地名伝承
（屠り園＝祝園、挑み河＝泉川、糞袴＝樟葉）

②日子坐王（開化天皇紀）系統と息長集団

やましるのおおつつきまわかのみこ
「山代之大筒木真若王」・・・・・・・・山城国綴喜郡

かにこめいかずちのみこ
「迦邇米雷王」・・・・・・・・蟹幡郷（山城町綺田）

やましるのえなつひめかりはたとべ
「山代之荏名津比売刈幡戸弁」・・・・・・・・木幡（宇治市）

たかきひめ
「高材比売」・・・・・・・・京田辺市三山木字高木

おきながたらしひめのみこと
「息長帯比売命」・・・・・・・・普賢寺辺りの「息長」は神功皇后由来地

③垂仁天皇紀

皇后「日葉酢媛」と姉妹にまつわる地名伝承・・・・・・・・「相楽」「乙訓」

④仁徳天皇紀・継体天皇紀

仁徳天皇皇后磐之媛の終焉の地「筒木宮」

継体天皇の「山背筒城宮」（同志社大学キャンパス辺り）

⑥欽明天皇紀

高麗国初の公式使節を饗宴でもてなしたという相楽館（現精華町）

等々

《参考資料①祝園神社》・・・・・・・・・・担当：古川

・祝園神社

主祭神：健御雷命、経津主命、天児屋根命

創建：(奈良時代以前)

主な神事：いごもり祭（毎年正月甲申の日より3日間）は、武埴安彦の魂を鎮める神事という伝承がある。

(歴史)

草創については不詳。「新抄格勅符抄」（神事諸家封戸、大同元年(806年)牒）に「祝園神四戸山城国」とみえるので、奈良時代に存在したことは確か。

(いごもり祭)

毎年正月甲申の日より3日間にわたり、いごもり祭が行われる。

第10代崇神天皇の時代に武埴安彦命が謀反を起こしたため討伐されたが、悪霊となってこの地に止まって田畑を荒れさせたため、村人たちは忌み籠もってこの霊を鎮めた、という伝説に基づき行なわれている。昔は、祭りの間牛や馬を隣村へ預け、一切の音を禁じ、精進料理を食し、居籠ったという。

1日目に神官が暗闇の中で行なう「風呂井の儀」、2日目に松明を燃やす「御田の儀」、3日目に「綱引の儀」が行われる。綱はわらに割り竹を巻いて作った直径約1メートルの輪に、竹を6本取り付けた巨大なもので、氏子が南北に分かれて3回綱引きを行ない、勝敗が決った後、武埴安彦の処刑場所と伝えられるいごもりに綱を運んで燃やす。

「崇神帝十年役武埴安彦破斬旧跡」の石碑が神社前にある。

・武埴安彦の乱（崇神天皇紀）

『日本書紀』によれば武埴安彦は、第8代孝元天皇と河内青玉繫の娘の埴安媛との間に生まれた皇子で崇神天皇（ミマキイリヒコ）の叔父にあたり、山背の地を支配していたと思われる。また、妻は吾田媛は巫女であろうか？

戦いは、の崇神天皇の叔父同士の間で行われる。すなわち、

大彦命・倭迹迹日百襲媛 VS 武埴安彦とその妻の吾田媛

注. (大彦命は、^{さきたま}埼玉稲荷山古墳から出土した鉄剣の銘文に、名前を確認できる実在の人物)

(あらすじ)

崇神天皇 10 年 9 月 27 日条によれば、四道将軍の 1 人の大彦命（武埴安彦の異母兄弟、阿倍臣祖）が北陸への派遣途中で不吉な歌を歌う少女に出会った。大彦命は引き返して天皇にこのことを報告する。そして倭迹迹日百襲媛命の占いによって武埴安彦とその妻の吾田媛の謀反であることが発覚する。

果たして武埴安彦は山背から、吾田媛は大坂（現・香芝市逢坂付近）から大和へと攻め入るが、吾田媛は五十狭芹彦命（吉備津彦命、四道将軍の 1 人）に討たれる。

武埴安彦は、木津川の北岸の地で川を挟んで大彦命と彦国葺（和珥臣祖）と対峙。（挑み河＝泉川）まず、武埴安彦と彦国葺とによる矢の射ち合いとなった。先に放った武埴安彦の矢は当らず、次に彦国葺の放った矢が武埴安彦の胸に当たった。ために、武埴安彦の軍は崩れになり、半数以上が斬られた（はふり苑＝祝園）。

残兵は吾君（あぎ）！と叫びながら、^{かわら}甲を捨てて木津川の岸を（^{かわら}伽和羅＝河原村）敗走した。ついに樟葉まで追い詰められて（糞袴＝樟葉）討たれた。

・・

戦いに敗れた武埴安彦は斬首された。斬られた首は木津川を飛び越えて祝園に落ち、胴体は北岸に残ったという。
いごもり祭の 3 日目の綱引きでは、この首をかたどった竹の輪を引き合うのである。

(古川のコメント)

武埴安彦は山背の地を支配していた王と考えられる。ヤマトのミマキイリヒコはこの戦いに勝って、日本国中枢の奈良盆地を固めたのである。そういう意味ではヤマト王権草創期の重要な戦であった。

ミマキイリヒコは、三輪山の神・大物主神を祀って疫病を鎮め、国を統一し、税制を創設した。この治績に対して日本書紀は、「故に称えて御肇国（はつくにしらす）天皇と謂う」とて、実質上の建国王であるとの認識を示している。

《参考資料②》湧出宮（和伎坐天乃夫岐売神社）^{わぎにいますあめのふきめじんじゃ}・・・・・・・・担当：古川

・祭神

天乃夫岐賣命、田凝姫命、市杵嶋姫命、湍津姫命

・湧出宮縁起

創建は今より1200年余り前の、称徳天皇の天平神護2年（766）に、伊勢国渡会郡五十鈴川の畔より、御祭人として此の地に勧請申し上げたと伝えられている。社蔵の文書（和伎座天乃夫岐賣大明神源縁録）によれば、御祭神天乃夫岐賣命とは、天照大神の御魂であると記されている。後に田凝姫命、市杵島姫、瑞津姫命を同じく伊勢より勧請して併祀したとある。

大神を此の地に奉遷した処、此の辺は一夜にして森が涌きだし4町8反余りが、神域とか化したので、「涌き出森」と呼称したと伝えられている。山城の国の祈雨神11社の1社として、昔から朝野の崇敬を集めてきた。

・本殿

現本殿は元禄5年（1692）の造営で、「三間社・流れ造り」で屋根には「千木・勝男木」置く。それ以前には中世の戦火で度々焼失し、源頼朝や、後小松朝、後柏原朝の御世にも再建された。

・弥生期の遺跡

涌出森境内一帯は、弥生期の居住跡として弥生式土器・石器等が出土した。また、社務所改築前の発掘調査では、竪穴式住居跡も確認された。

・籠り祭

籠り祭は、国の重要民俗文化財に指定。同じ名前の祭りが祝園神社にもある。祭りの起源には、武埴安彦の魂を鎮めるといふ伝承を持つが、後世は雨乞いや田植え等の農事に関する祭りとなっているようだ。

・「和伎坐」（わきにいます）

日本書紀には、武埴安彦の乱において戦に敗れた兵たちが「我君」（あぎ、わぎ）と叫んだという。この神社の名前の「和伎坐」（わきにいます）との関連がありそうだ。

参考文献：「京都の歴史を足元からさぐる」（宇治・筒木・相楽）森浩一著

《参考資料―③》普門山真言宗 蟹満寺・・・・・・担当：川井

・蟹満寺

奈良朝以前に秦氏の一族、秦和賀によって建立。のち、行基菩薩の関与により篤い信仰を集める。

本尊の国宝・釈迦如来坐像は白鳳時代の名作と言われ、飛鳥寺大仏より百年後8世紀頃の作と考えられる。当時、標準とされた丈六仏（立つと4.8m）である。

如来仏は人間を超越した様相を呈し32相もの特徴を持ち、頭部・頸部特に掌は曼網相という指の間に水かきがあり、衆生の悩みを洩れなく悟りの世界へ救い上げると言われている。

・「伝承 蟹の恩返し」

元々は地名から綺田寺と称したが、平安期、今昔物語に創建にまつわる縁起が記され、仏教説話として世間に広がり蟹満寺と改称された。

蟹満寺縁起ばなし

「この地にいた娘が川辺で蟹を弄ぶ子供に魚をあげるから蟹を逃がしてやりなさい、と蟹を助けてやる。また、娘の父親が蛇に呑み込まれそうな蛙を不憫に思い、蛇に蛙を助けて呉れるなら私の娘を与えると約束する。

翌日、男の姿になった蛇が現れるが、先日助けた蟹が恩返しに蛇を切り刻む」と言うお話。親子は亡くなった蛇と蟹をこの寺に葬り供養する。

以後、蟹満寺では毎年4月18日に蟹の放生会を行っている。

(補足)

- ・寺の名前は蟹幡（かむはた）郷という美称である「神（カム）」と織物を意味する「幡（ハタ）」からなる地名に由来する。この地は古くから渡来系で織物にたずさわる人（秦氏の一族）が多く住んでいたようである。
寺の創建年代は周辺の発掘調査から飛鳥時代後期（7世紀末）の創建と推定されている。

- ・蟹幡・蟹満⇒綺田は、彦坐王の子として日本書紀に記されている「迦邇米 雷王」ゆかりの地とも考えられている。

《参考資料④》^{くいおかじんじゃ} 昨岡神社・^{くさちじょうあと} 草路城跡・・・・・・・・担当：川井

・昨岡神社（くいおか）（いのおか）

祭神：宇迦之御魂神・菅原道真。中世、天満宮と称した時期があり、1877年、式内社となる。建築年代など不詳。明治10（1877）年に延喜式内昨岡神社と決定、今の社名にあらた

境内の巨木・スダジイは、平成3（1991）年に「京都の自然200選」に指定された。

萬葉集：「春草を馬昨山ゆ越え来なる 雁の使は宿り過ぐなり」（柿本人麻呂）

・草路城跡

この神社地は、山城国一揆（1485年）の草路城跡と言われている。

室町中期、応仁の乱と呼ばれた内乱の余波は地方に拡がり、各地で国人・農民の一揆が武装蜂起し戦国の様相を深めてゆく。

この地の守護職 畠山政長と畠山義就ら管領家の圧政に蜂起、軍勢を退去せしめ自治支配を行うが1493年、内訌の結果解体する。「内訌」・内輪もめのこと。

・応仁の乱（1467～1478年）

畠山家・清和源氏 室町幕府三管領の一。畠山持国の養子 政長と実子 義就との家督争いに端を発し、将軍 足利義政の跡継ぎ騒動が絡み、東軍 細川勝元、西軍 山名宗全との対立を生み、11年間に及ぶ内乱となる。事態は京都にとどまらず地方に拡散し、幕府の衰退、都の荒廃を残し武士団の領国争いへと戦国の世を形成してゆく。

川井のコメント

「歴史の結節点には必ず大きな争乱が起きる」

「壬申の乱 律令政治が定まる」、 「保元・平治の乱 武家政治の勃興」、
「源平合戦 平家滅亡 鎌倉幕府の成立」、 「応仁の乱 室町幕府の衰退」、
「関ヶ原の戦い 徳川幕府成立」、
「桜田門外の変大老 井伊の専横・幕府に翳り」、「戊辰戦争 大政奉還」
これらの背景には皇位継承・名家の相続争い・権力の専横などなど。

私はこれらの基底には天武・持統期の公地民制が公家・貴族など特権階層の農民たちへの収奪、圧政が亀裂となり、現代の教訓としても生きているように思う。

人間の業がある限り、こんな時代を紡いで行くのでしょうか・・・・・・・・。

人間は悲しいものですね～。

《参考資料一⑤》古山陰道の山本駅遺跡・・・・・・・・・・担当：古川

・山本駅遺跡

飛鳥の都から山陰地方に至る古代の道（古山陰道）が通り、大化の改新に伴う条里制で設けられた綴喜郡第四条山本の里は、この辺りと推定される。

ここに和銅 4 年（711）、山背国綴喜郡山本駅が置かれた。古山陰道と古山陽道の分岐点であり、また木津川の渡しから古道「田原道」の起点でもある。畿内の当時の 3 大橋の「山崎橋」宇治橋」「瀬田橋」に通ずる交通の要衝として早くから拓けた土地であった。

現在は、「山本駅遺跡之碑」が残る。



山本駅跡

・寿宝寺

慶雲元（704）年、天武天皇の時代に創建されたと伝えられる。古くは「山本の太寺」

と称せられ、七堂伽藍の備わった大きな寺であったが、木津川の氾濫により、享保 17

（1732）年、現在の小高い地に移転。

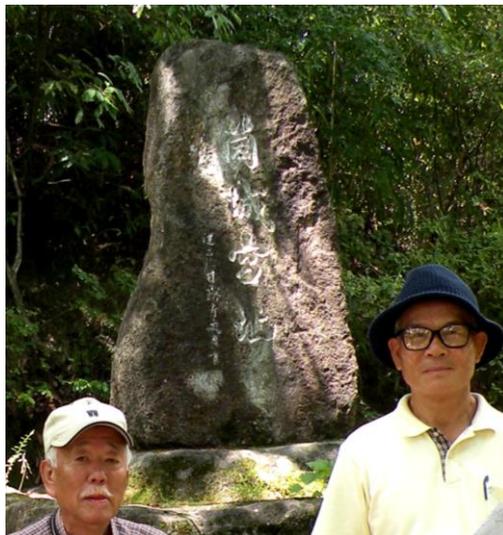
重要文化財である十一面千手千眼観音立像は、像高 180 センチメートル、一木造。平安時代後期の作で、藤原時代中期の様式をそなえた端正典雅な立像。衣紋や面相の表現が代の特色を示している。河内の「藤井寺」と奈良「唐招提寺」の観音と共に、実際に千本の手を持つ観音として三大傑作のひとつである。

《参考資料一6》同志社大学キャンパス内遺跡・・・・・・・・担当：川井

・キャンパス内遺跡と案内図・・・・・・・・別紙の資料参照

・継体天皇筒城宮（紀）

体天皇は507年2月樟葉宮（枚方市楠葉丘の交野天神社付近が伝承地）で即位したが、4年後の511年10月、木津川左岸の筒城宮（京田辺市多々羅都谷辺りか）に遷した。宮の遺構は確認されていないが同志社大学構内に石碑がある。



（継体天皇の詳細は樟葉宮の項で説明する）

・磐之比売の筒木の宮

仁徳天皇皇后の磐之比売が、天皇と仲たがいし淀川から木津川を遡り、筒木のヌリノミの館に身を寄せる。磐之比売の筒木の宮はこの辺りで、ヌリノミの館のことだろうと言われる。

・ヌリノミ

百済系渡来人で養蚕、織物、水運に長ける集団。新撰姓氏録に「諸蕃の項」に後世の一族についての記載がある。

「・・・百済人努理使主の後なり。応神天皇御世帰化し（中略）顕宗天皇の御世、蚕を織り絶絹の様を献じ、依りて調首の姓を給う」

・佐紀古墳群と磐之媛陵

日本書紀には「皇后を乃羅山に葬る」とある。佐紀盾列古墳群のヒシアゲ古墳が比定されているが、なぜ佐紀の地なのかにはいろいろの説がある。

「ありつつも 君をば待たなむ 打ち靡く我が黒髪に霜の置くまで」

≪参考資料一⑦≫ 観音寺（普賢寺観音堂）・・・・・・・・担当：川井

・住職による説明があります。

・観音寺（普賢寺）

伝承によれば、白鳳年間（7世紀後半）、法相宗の僧・義淵により創建された観心山親山寺が始まりと伝えられる。天平16年（744年）、東大寺初代別当の良弁が中興し、その後、奈良の東大寺の実忠が入寺し、宝亀9年（778年）には五重塔を建てたという。

延暦13年（794年）の火災以後、たびたび火災に遭い永禄8年（1565年）の焼失後は大御堂一字を残すのみとなった。

観音寺本堂裏の丘陵上には塔の礎石が残り、7世紀から8世紀の古瓦が出土することから、ここが古代普賢寺の遺構と推定されている。

（注）

大御堂観音寺の前身は「息長山普賢教寺」という。「息長」はこの辺りに古い地名で、息長帯比売（神功皇后）ゆかりの地という（塚口義信氏）の説がある。



≪参考資料一⑧≫大住車塚古墳・大隅南車塚古墳と大隅隼人・・・・・・担当：古川

・大住車塚古墳、同南塚古墳

5世紀初期（古墳時代中期）に造られた前方後方墳、全長66メートル・前方部は幅18メートル・同高さ1.5メートル、後方部は一辺の長さ36メートル・同高さ4.5メートル。

古墳の周りに長方形の周濠（しゅうごう）の存在が考えられ、棺が納められていた主体部は竪穴式石室か粘土部であったと推測される。昭和49年に国の史跡に指定。西側に並ぶ大住南塚古墳も同じ形・同じ大きさで、周濠をもつ前方後方墳が二基並ぶという、全国でも珍しい例である。

・大隅隼人の居住地 旧綴喜郡大隅郷（京田辺市大住）

旧綴喜郡大隅郷と言われ、大隅半島の隼人が5C頃に移住したと言われる。畿内にある4か所の隼人移住地の一つ。

南九州には、大住隼人（大隅半島）と阿多隼人（薩摩半島）とで墓制が異なり、大住隼人の墓室は地下式横穴や横穴式で、京田辺市の大住北西から八幡市まで及んでいる。大住車塚古墳はその族長の墓か。

（その一つは17代履中天皇記の曾波訶（そばか）理（り）の墓とも。・・・・森浩一氏の説）

・甘南備山

大隅隼人の聖なる山で、その頂の甘南備神社には月読神が祀られている。月読神と甘南備山信仰は、大隅隼人の風習に係るものとされる。（森浩一氏）

（閑話休題）

かぐや姫物語のルーツと隼人文化

（森浩一先生の説）

かぐや姫の舞台は、筒木垂根王と月読神社と竹林の揃った山城の綴喜である。筒木には大隅隼人が住み着いて、その文化に多くの共通点があると指摘される。

- ①「迦具夜比売」は垂仁天皇の妃で「かぐや姫」のモデル。大筒木垂根王の女。
- ②大筒木垂根王は竹の根が張った堅固な場所の宮という意味で京田辺の周辺。
- ③大筒木垂根王（開化天皇と竹野媛の孫）で同母弟に讃岐垂根王「讃さぬきの造」
- ④この地には隼人が古くから定住し、竹・月・との縁が深い。
 - ・隼人には、月読信仰月、竹細工が特技。月読神社、甘南備神社に隼人文化の関連。
 - ・かぐや姫が出した難題の一つに、子安貝（つばくらめのもたるこやすの貝）がある。子安貝「寶貝」は、隼人の文化であると。

≪参考資料—⑨≫ 継体天皇と樟葉宮 担当：藤田

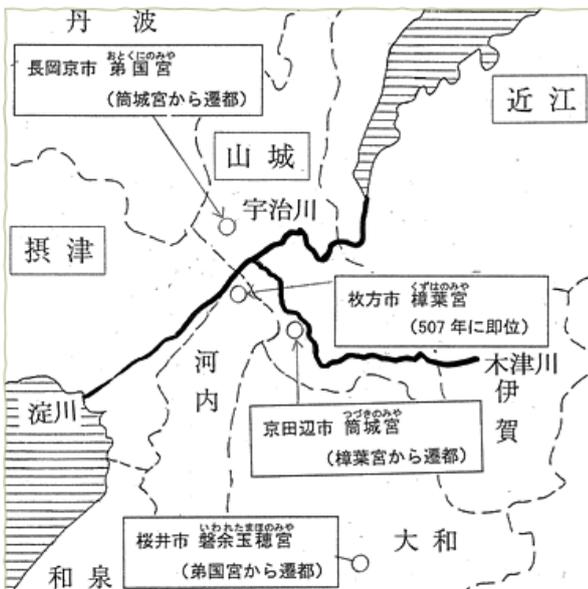
(1) 継体大王の即位

先の25代武烈大王には子どもがなく、お世継ぎをどうするかが問題となった。そこで、大和の重鎮である大伴金村大連や物部麁鹿火大連や許勢男人大臣らが協議をはかった。最初は丹波国の倭彦王を抜擢したが、迎えの兵士をみて恐れをなして、倭彦王は山の中に隠れて行方不明となってしまった。

そこで、「ご子孫を調べ選んでみると賢者は男大迹王だけらしい」となり、標しの旗と御輿(みこし)を備え越の国の三国へお迎えを出した。男大迹王は「ゆったりと平常どおり落ち着いて床几に腰掛け、侍臣を整列させて、すでに帝の風格がおありになった。」といわれている。最初は「心の中で疑いを抱き、すぐには承知しなかった」男大迹王であったが、「河内馬飼首荒籠(かわちのうまかいのおびとあらこ)に使いを出し、大臣、大連らの本意を知り、発たれる決心をした。」という。そして、河内国交野郡樟葉宮(くずはのみや、大阪府枚方市)で即位(507年)することになる。

(2) 継体大王の遷宮

雄略期に、難波津の整備と大型帆船の普及による琵琶湖、淀川水運の興隆と鉄の生産交易で、越の国で力を蓄えた継体天皇は、さらに要衝の樟葉、綴喜、弟国で支持基盤を盤石のものに固めながら、順次遷宮を重ねたのではないか？(経済基盤は大和川流域から淀川流域への基盤の移行か)



樟葉宮(507 即位)

三島と古代淀川水運を生かした地盤
 (日本海、琵琶湖、宇治川、木津川、淀川水系)
 当時の樟葉は淀川水運の要所(船溜まり)
 三島氏、河内馬飼氏、茨田連氏の支援

筒城宮(511)

息長集団が居住、息長山普賢寺、息長氏の支援
 山代之大筒木真若王、(山城綴喜)、
 迦邇米雷王(蟹幡郷現在の相楽郡山城町綺田)、
 高材比売(現京田辺市三山木字高木)
 息長帯比売命(神功皇后伝説由来地)

弟国宮(518)

淀川、桂川水系 継体を支援する有力政治集団
 (秦氏、出雲氏)

磐余玉穂宮(526)

531年2月7日磐余玉穂の宮で崩御
 12月7日藍野陵に葬る

(今城塚古墳が継体天皇の御陵とされている)

仏像とは

By 川井

1、仏像の誕生

仏教は今から2500年ほど前にインドのゴータマ・シダッタという人が始めた宗教である。この人の事を釈迦・釈尊・世尊・仏陀・如来などと呼ぶ。

古来よりインド人は優れた神や超人的な人を像として表すことはしなかったが、釈迦が入滅してから500年ほどしてから造仏が始まる。

紀元一世紀ころ。インド北西部 現在のパキスタン ガンダーラ地方やインド中央部マトゥラー地方で釈迦像が堰を切るように造り始める。

人と異なる特性や福相は32相80種好ときまりが定められる。菩薩は釈迦の王子時代の姿をモデルとし明王は従者の姿で表現された。

2、仏像の種類

如来・・・日本で造られたものは限られる。釈迦・阿弥陀・薬師・毘盧遮那・大日。

菩薩・・・弥勒・文殊・普賢・観音・勢至・虚空蔵・地藏。

明王・・・不動・愛染・五大明王・孔雀・大元帥・烏薙沙摩。

天部・・・武装神と福德神がある。バラモン教（ヒンズー）民族宗教。西方から来る。

梵天・帝釈天・毘沙門天・吉祥天・大黒天・聖天・鬼子母神・弁財天・羅漢
荼吉尼天・四天王・八部衆・十大弟子

3、時代鑑定

金属造：銅が主流だが金・銀・鉄もある。飛鳥～奈良時代。平安後期～鎌倉時代にも。

塑 造：白鳳～奈良時代。鎌倉～室町時代にも。

乾漆造：脱活乾漆造は白鳳～奈良時代、木心乾漆造は奈良～平安時代に限られる。

木 造：飛鳥～白鳳時代は樟が多い。檜は奈良時代以降、特に平安時代が多い。

石 造：各時代に造られる。

参考：飛鳥時代・・・仏教伝来（552）から大化の改新（645）

白鳳時代・・・大化の改新～平城遷都（710）

奈良時代・・・平城遷都～平安遷都（794）

平安時代前期・・・平安遷都～遣唐使廃止（894） 弘仁・貞観時代

〃 後期・・・平家滅亡（1185）藤原時代

鎌倉時代・・・武家政権誕生（1185）～南北朝分離（1333）

4、光背・台座・姿勢・天蓋・持物・印相など見方は多岐に分かれる。次の機会に。

仏像図解

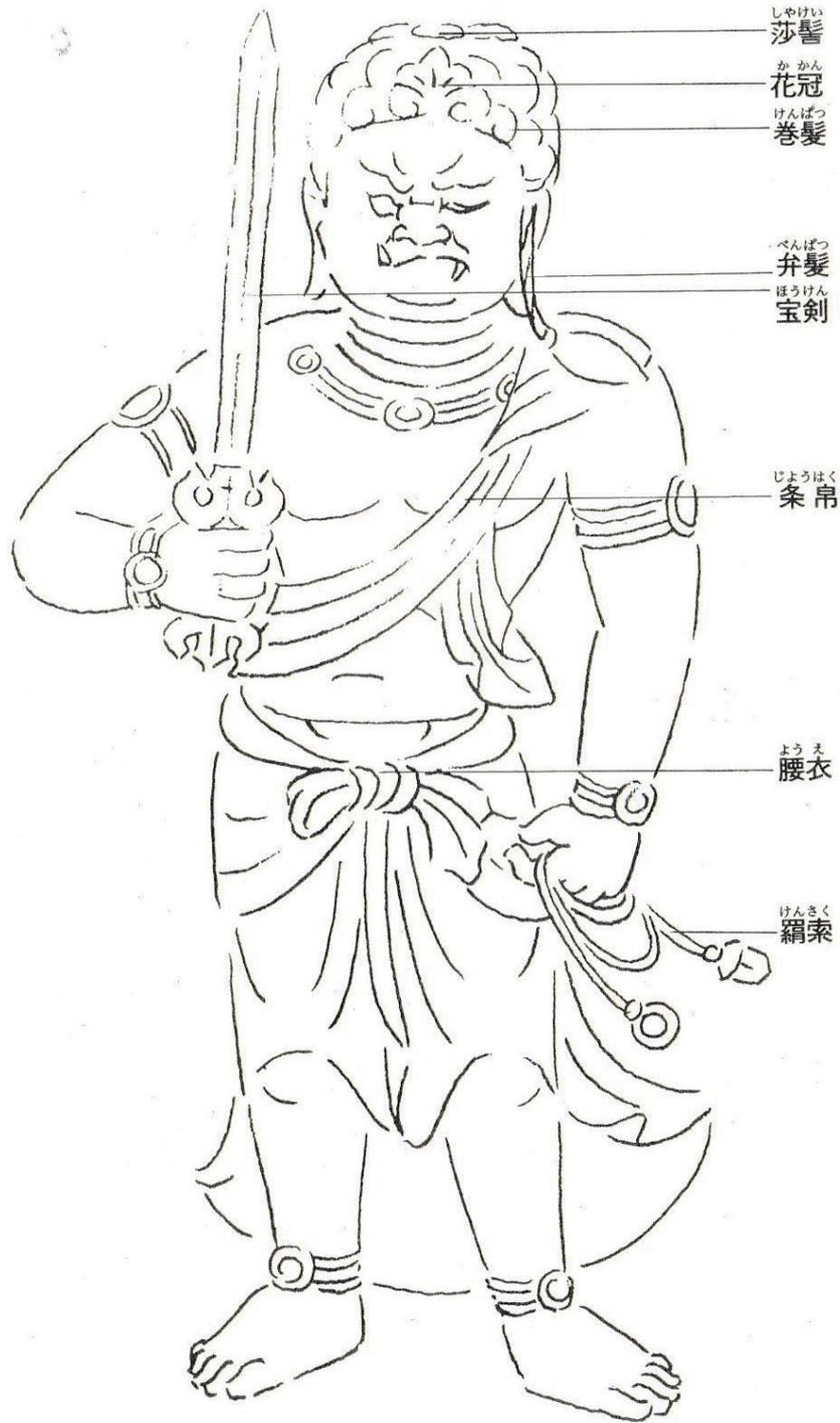
1、如来像



2、菩薩像



3、明王像



4、天部像

